

牢屋の原

長谷川時雨

青空文庫

金持ちになれる真理となれない真理——転がりこんで来た金玉かねだを、これは正当な所得ではございませんとかえして貧乏する。いまどきそんなことはないかもしれないが、私のうちがそれだった。

御維新のあとのごたごたが納まっても、なかなか細こまかしいことは何時いつまでも残っていたのであろう。転ころがりこんで来た金玉を押し返してしまった人たちが、ある日こんなことをいつていた。

「たいした土地になった。」

「だからとっておおきになればいいのに。」

それは小伝馬町に面した大牢たいろうの一角を、無償で父にくれよう

といった当時のことを母が詰なつたのだ。

丁度首斬きり場のあたりだったというところの柳の木が、厠はの小窓から見える古帳ふるちようめんや面屋うめんやの友達のうちから帰って来て、あたしが話したつづきからだつた。

「西島屋のならびをずっとくれるといったのだが、おら不快いやだからな。」

「お父さんは欲がないから、断つてしまったのだとお言いなのだよ。今じゃたいした土地なのにねえ。」

母は、土一升金一升のまんなかで、しかもめぬきの土地の角地面の地主さんになれなかつた怨うらみを時たまこぼす。

「あすこはな、不浄場といつてたが、悪い奴ばかりはいないのだ。

今と違つてどんなに無実の罪で死んだものがあるかしれやしない。おれは斬罪ざんざいになる者の号泣なきごえを聞いているからいやだ。逃れのがよう、逃れようという気が、首を斬られてからも、ヒョイと前へ出るのだ。しでえことをしたもんで、後から繩をひっぱっている。前からは、鬚まげをひっぱって、引っぱる。いやでも首を伸す時に、ちよいとやるんだ。まあ、あんな場処はほしくねえな。」

父が流行はやりの長い刀をぶつこんでいた時分、明渡あけわたされた江戸城の守備についていた時、苑内紅葉山もみじやまに配置してある鹿の置物を狙い撃ねらうちにしたものもあるとかいうほどだから、乱暴者に違いなかつたであろうに、その人がそういうのだ。その後打首が廃され、絞首になる時その器具を造るのを調べさせられて用いた夜、どう

しても寝具合がわるく、三晩もうなつたので、役人なんざまっぴらごめんだと、^{かじ}噛りつきたがるはずの椅子を^{ほう}投りだしてしまった。そんな折の関係と土地ツ子なので、あの広大な土地を^{ただ}無償でくれないというのだつたらう。無償とはいわないで、長谷川この土地はお前の名にしておけといわれたのだつたそうだ。その当時の政府要路に深い縁のない父でさえそうだったから、その他の懐が、ふくれほうだいだったのは言うまでもなからう。岩崎は丸の内一帯の大地主だ、丸の内といえば諸大名の官宅のあつた土地だ。

その時、祖母も言った。

「浜町の三河様の邸^{やしき}あとも、くれると聞いたのだそうだよ。」
その時の断りかたがまたふるっている。折角ですが老母がいや

がりますから——あすこは糞船くそぶねの一ぱい寄るところで——と。
 三河様の邸跡は大樹が森々しんしんとして、細川邸とつづき堀越しに大
 川の水がすぐ目の前にあり、月見に有名な土地で、中洲は繁華に
 なった。

大橋と、両国橋の間の中洲には、懲役人が赤い着物を着て、小
 船にのつて土運びをしていた。女橋と男橋がかかつて、土地開き
 をしたころの夏の人気は、人形町通りから、埋たての中洲へと集
 っていた。ただもうめちやくちやに賑かだった。おでんやは鍋なべの
 廻りに真黒に人が立ち、氷やは腰をかける席がないほどの繁はん。
 昌うだ。氷やといつても今ののように小体こていな店ではない。なかなか
 広い店で、巾の広い牀しょうぎ几こが沢山並んでいた。涼しげな、大きな

滝を忍ばせる硝子の簾ガラスすだれ——聯れんがさがつて 提ちようちん灯とうや、花瓦斯ガスの光りうつが映りゆらめき、いせいのよいビラが張りわたされ、ねじ鉢巻のあにいが二、三人手を揃えてガリガリ氷を搔かきとばしていた。小女が赤いたすきで忙せわしそうに客の間を走っていた。

いま、デパートの食堂へゆくと、ふと思出すのは、様子はかわっているが、あたしの子供の時分の、えびすやとか、ほていやとかいった呉服屋や、そのわきにあつた、おしるこはぎもちや萩の餅もちの店のことで、店さきの高いところから、長い暖簾のれんがかけてあつて、紺地に大きく彩色したえびすだのほていだのがついていていた。その頃流行はやりたてだったであろう噴水があつて大きな金魚がいた。だが、食たべものは簡単だ。お餅か、お団子位だ。浅草の金竜山にしてもあ

んと、きなここと、ごまのついた餅、芝の太々餅だいだいもちもおなじくであり、大橋ぎわのおだんご、谷中芋坂いもぎさかのおだんご、そのほか数えたらいくらでもあるが――

中洲は納涼にもってこいだから、川開きの時分の賑いは別段だった。夏祭りと両国の花火は夏の年中行事と市民にはなっていたのだろう、あんぽんたんも昼寝からむりに覚されて、行水の盥たらいのなかへ入れられ、お船へのせて花火を見せるからと、だましましたましいやがるのに着物をきせられた。

あたしの家で船を仕立るのか――たぶん、前出の金兵衛おじさんの船が来ていたのだったろうと思う。まだ日の高いうちから、金兵衛さんが紺の透すきとお通った着物を着て、白はくせん扇であおいで風通

しのいい座敷に座っていると、顔見知りの老船頭だの、大工の棟とう梁はりのところの伊三いさという甥おいだのがかわるがわるに、一升樽だるだのその他のものを運んだ。ものわかりのいいその人たちが、庭の敷石のところところに立って、座敷の人と応うけこたえ対たいしていたのが、ばかにクツキリと今の私の目にも浮かぶ。

船のつけてあるところは、三河様よりこつちよりの細川邸せの清いし正公しょうこう様のそとところだった。夕潮が猪牙船ちよきの横つばらをザブンザブンとゆすっていた。

「まず！ 一杯ひとつ！」

おとなたちはおいしそうにお猪口ちよこを口にもっていった。と、河の中の交際がはじまる。

「いよ——」

遠くの方から挨拶をしあうと、両方の船頭が腕に力をギイツと入れる。

「あれは材木町の船だ。」

竹河岸の材木やは、家内中で派手な船遊山ふなゆさんをやっている。暮れないうちの花火は、この船遊山の景物なのである。人々は水をたのしみ、空を仰ぎ、せまい家内や、近所の目から開放された気保養を、涼風とともに満々とうけ入れ、ゆるゆると楽しむのだった。

河上かみの方から出てきた船は、下流しもの佃つくだの方まで流してゆく。下流の方から出てきた船は竹屋を越えて綾瀬の方まで涼風におしお

くられてゆく。そして夕暗といっしよに両方がまた漕ぎよせてくる。両国橋の上下に——

そのころ、五、六歳のアンポンタンの感想は——というともむずかしいが、おしつこのことだった。小船にはそういう設備がない。男の人は簡単にすませるが、といつても、まだ暮れきらない大川に、一ぱい船があつてはそう勇敢な人ばかりはない。まして謹ましいその時代の女たちの困りようは察しられる。岸近い船はわたりをかけて、尾上河岸あたりのいきな家にたのむが、河心のはそうはいかない。気のきいた船頭が、幕や苦で困いをして用をたさせると、まるで、源平両陣から那須与一の扇の的でも見るように、は入る人が代るたびごとにヤアヤアと囃す。人間で、なんて

癩しやくなものだと、いつて見ればそんな風にアンポンタンは片腹痛いたか
つた。

「おや？ この子は笑つたよ、何がおかしかったのだ。」

おじさんたちにはわからない。ちいさな、てんしんらんまんだ
る幼子だからこそ、赤ン坊でいえば虫が笑わせるといった笑い—
—この場合では嘲ちようしやう笑わらを禁じ得なかつたのだ。

「ヤア爺じいさん！」

とかなんとか、笑つた男が笑われて幕の囲いにはいり、テレくさ
そうに出てくるのだ。ばかな奴やつら！ その水みづで盃さかずきをそそぎ、その
流れで手拭てぬぐいをしぼって頭や胸を拭く、三尺へだたれば清きよしなん
て、いい気なものだ。

「玉や——」

みんなが口をあいて空を仰ぎ見る。だがなんと、暗い河の水の油のように重くぎらぎらすることぞ！ 水面みずを見ると怖い。

アンポンタンは父親の膝ひざを枕まくらにしてボンヤリしていた。もう、そろそろ船が動きだした。あたしは大きくなってからもそうだが、賑やかなあとのさびしさ^{ひざ}がたまらなくきらいだった。ことに川開きは、空の火も家々の燈も、船の灯も、バタバタと消えて、即ちたちまにして如法によほう暗夜あんやの沈黙しんもくがくるからたまらなく嫌だ。遠くの方へ流れてゆく小さなさびしい火影ほかげと三味線の音——小さい者は泣くにもなけない不思議なわびしさに閉じこめられてしまう。

そのまだ、それほど船がバラバラにならない前、すつと摺すれち

がった屋根船から、

「あら——さんだ！」

という、これをお着せなさい、川風はさむいわとでもいったのであろう、艶えんな声がしてフワリと私の上に投ほうりこまれたものは、軽いフワフワした薄綿のねんねこだった。多分帰りの夜風を用心して入れてきたものだろう。私はピヨコンと父の膝から頭をあげた。先方は紅提燈あかちようちんが沢山ぶらさがっているので船の中はあかるい。私たちよりずっと高いところにいるように、膝の方まで見えた。意気としまな年増というのだろう、女ばかりがいた。みんなはでな声を出した。

あたしは終りの花火なんか、あとがさびしいから見ないで、そ

のねんねここにふっさりと包まれて父の膝に狸寝たぬきねをしていた。子供というもの案外ばかにならないと思うのは、今の自分よりよつぽど不正直で要領を得ている。そして元柳ばしぎわに船をつけてもらうと、抱っこしたまま、いい匂いのもにくるまれて、葉やげん研堀ぼりの囲いものの家へ投げこまれた。

話はそれが三河様というのは、

風ふくな、ナア吹くな、

三河様の屋根で、

銀羽根ひろつて……

と羽根つきながら風が出てくると呪まじないに唄う大川端の下邸跡しもやしきあとである。向岸には大橋の火の見櫓やぐらがあつて、江戸風景にはなじみ

深い景色である。細川下邸の清正公門前の大きな椎しいの木の並んだ下には、少壮時代の前かけがけ姿の清方きよかたさんが長く住まわれて、門柱に「かぶらき」と書いた仮名文字の表札がかけてあった。それより前のことだが、清正公様の傍わきに歯をいたくなく抜いてくれる家があるというのでいったら、小さな家で、古い障子を二枚たてて、歯みがきを売っている汚いおじいさんが抜いてくれた。大きな樹きのうれに、小さい蚊虫かむしがフヨフヨと飛んでいる夕暮れでうす暗い障子のかげで、はげた黒ぬりの耳みみだら盥ひざがしらを片手にもたせて、上をむきなさいといわれた。おじいさんの膝ひざがしら頭に頭のうしろをもたせかけ、仰向けあおむにさせられると、その腐ったような顔とむきあった。おじいさんはやっどこみみたいなものをもっている。怖

いから眼をつぶったら、ガクリと音がして揺うごいていた歯がぬけた。ポコンと穴があいて、血がいくらでも出る。口もゆすがせないで、きたない手でおじいさんは白い粉の薬くすりをつけてくれた。残りを小袋に入れて渡して、血がとまらなかつたらつけろといった。お代が弍銭だというので、なんぼなんでも安くつてびっくりした。蔵前の長井兵助の家は、店で歯磨きや楊ようじ子こを売っていて、大きな長い刀が飾ってあった。ヤツと掛声してすぐに抜いた。代は五銭の時と十銭の時があった。浅草公園でお馴染なじみだから、大概長井兵助へゆくのだが、お友達におしえられてこの汚いおじいさんの家へ行ってしまった。

花火の晩といえ、ある年、丁度花火の盛りな時刻に光りもの

が通った。二升もはいる大薬缶やかんほどの、鈍く光ったものが、地の
上二、三尺の高さで、プカリプカリと流れていった。アンポンタ
ンの家の小さい女中は、裏の方にある厠はばかりから出たとき、すぐそば
をスーツと流れていったのでキヤツと声をたてた。祖母は金玉かねだま
だといった。金かな 鹽ならい か鍋なべでふせなければだめなのだといった。
都会の夏の夜でさえ無気味なものが、人里はなれた原っぱなんぞ
でぶつかつたらどんなだろう。

花火の風船のように飛んでしまった。はじめの牢屋ろうやの原へ帰ろ
う。中洲に賑いをとられない前は、牢屋の原が小屋がけ見世もの
場でさかっていた。つとめて土地の不浄を払おうとしたのである
う。表通りの鉄道馬車路を商家にし、不浄門（死体をかつき出し

た裏門（のあつた通りと、大牢らうのあつた方の溝みぞを埋めて、その側の表さに面した方へ、新高野山こかうぼう大安楽寺さまと身延山にちれん久遠寺さまと、村雲別院むらくもと、円光大師寺えんこうだいしさまの四ツの寺院おてらを建こんり立ゆうし、以前の表門もとの口が憲兵屯所とんしよで、ぐるりをとりまいたが、寺院がそう立揃たわないうちは、真中の空地に綱なわたりや、野天の輕業かるわざがかかつていた。

その中でも、蠟燭屋ろうそくや一い蝶ちょうという仕掛しけ怪談話かいだんわが非常にうけた。そまつなつくりではあつたが、寄席よせい在ありも広いくらいな地ちどりで、だんだん半永久に造り直していつて、すっかり座れるようになつていた。寄席と違ちがうのは、客席きやくせきの前まへの方かた——入口いりぐち近くでも曲芸まがまがをやり高座たかざでもやるのだ。籠かご抜け——あるいは白刃はくへんを縦横じゆうけいに突通つうし、ある時は蠟燭ろうそくの灯あかりを透間すゐまなく、横筒よこづつの蛇籠へびかごのように

長い籠にならべて、その中を桃色の鉢巻きをした子供が、繻子しゆすの着物はかまに袴をつけて、掛声もろとも難なく飛抜ける。その鮮かな曲芸と、曲芸師の身なりが、漸くようやポツポツ拾いよみしていた、曲きよく亭てい馬琴ばきんの『八犬伝』のなかの犬阪毛野いぬさかけのを思わせて、アンポンタンの空想ずきを非常に楽しませてくれた。もとより寄席ではない見世ものだから、その曲芸は客を誘うために、あるていどまで、外おもてに立見する客へも見せるから、人気はすばらしかった。怪談の前になると、立っているものも続々はいつてきた。

高座の仕掛けは、その頃はやった何段返しとかいうので、後はいけ景けいが幾段にも変るのだった。場内が暗くなると行燈のそばに幽霊が立っている。青テルの人魂ひとたまが燃えゆれる――

「かあいやそなたは迷うたナア」

と真打ちしんうちの一蝶親方が舞台がかりでいうと、

「うらめしや……」

なんとかと幽霊がいうていた。だが、あたしはぞくぞく怖こわがった。いま考えると、なかなか策師さくしだったといえる。江戸人の——いえ、当時の日本人の誰にも感じられる、厭いやな連想をもった、場処ばじょからである。江戸三百年、どんなに無辜むこの民が泣いたか知れない、脅おびやかされた牢屋のあとだ。ことに世の中が変動する前には、安政の大疑獄以来、幾多有為の士を、再び天日てんぴの下にかえさず呑のんでしまった牢屋の所在地だ。鬼哭きこく啾しゅう々しゅう、人の心は、その土を踏むだけで傷みに顫ふるえる。その心理を利用したのだ。たねはどん

なチャチなものでもかまわない。掴つかんだものが生きている。見る方、聴く方の、お客の方から働らきかけてくる神経の戦おのきがある——そして、下座げざにはおあつらえむきの禅のつとめ（鳴ものの名称）和讃やらお題目やら、お線香の匂いはひとりでに流れってくる。人情の弱点の怖いもの見たさ、客は昼も夜も満員——夜は通りの四つ角の夜店と、陽気な桜湯の縁台が、若衆たちのちぢまった肝かんったまをホツと救う——

青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年刊行

入力：門田裕志

校正：松永正敏

2003年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

牢屋の原

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>